

シリーズ
「景観文化考」第7回

S E R I E S

歩く速度が文化を育む

L A N D S C A P E

「街歩き」が好きである。初めての土地でも目的地の位置をおおよそ確認してから、足の赴くまま気の向くままに道を選んで、街並景観を楽しみながらぶらぶら歩く。「表通り」が格式のある正装したハレの景観であるなら、「裏通り」は、日常生活の光景が繰り広げられる場で、親近感を抱く生活の風景である。私たちが普段何気なく暮らしている都市や農村の空間も、場所に合わせてさまざまな使い分けが行われている。街をゆっくり歩いていると車のスピードで移動している時には見過ごしていた、街並景観を構成する詳細な出来事を発見できる。花が美しく飾られた商店街や住宅地では、地元の人々の我が街に対する愛着やこだわりある生き方が伝わってくる。商店街の看板の出し方や店先の飾り付けには、経営者のセンスがうかがえる。乱雑で殺風景な印象の街には、そこで暮らす人々の心の渇きと地域コミュニティの欠如を感じることができる。

長い歴史を持つイギリスの歩く文化が創出した「フットパス (Foot Path)」であるが、最近では北海道でもフットパスの名称が通じるようになってきた。道内の各地域で、さまざまな歩く道の文化が育まれている。北海道には、四季が明快で豊かな自然、海・川・山と湿原や湖沼群などの変化ある地形、地域固有の歴史・文化など、多種多様な地域資源が存在する。さらに、水田・畑作・酪農の営みが形成する美しい農業・農村景観には、先人たちの北海道開拓にかけた苦闘がしのばれるとともに、毎年繰り返し耕作される農業者の努力の結晶をうかがい知ることができる。多様な地域らしさが反映された街や村を通過し、変化ある農村景観に季節ごとの自然の恵みを体感できるフットパスがネットワーク



中井 和子 (なかい かずこ)
中井景観デザイン研究室 代表

東京出身。筑波大学大学院環境デザイン専攻修了。(株)G.K.インダストリアルデザイン研究所(東京)勤務を経て、1975年～78年フランス政府給費留学生として、マルセイユ及びパリの国立美術大学で建築・環境デザインを学ぶ。1985年建築・環境デザインの研究所を設立し現在に至る。北海道教育大学・札幌市立大学・北海道工業大学の非常勤講師、『まちの色彩作法』(共著)、『農業・農村と地域の生態』(共著)、『北のランドスケープ』(共著)など。



化されれば、魅力ある体験型の観光資源となる。北海道の本当の素晴らしさを多く人々に知ってもらいたい。

歩く道の起点や終点には、公共交通機関や駐車場を有する道の駅のような施設があると便利である。さらに、町の温泉施設などを起点とする回遊性あるフットパスでは、自然や田園空間を歩いた後の心地よい疲れを、地場の料理と温泉が癒してくれる。初夏に南幌の温泉を起点にしたフットパスを歩いた。田植えが終わり緑に色づく水田を通過して、麦畠を直角に曲折してからトンビが鳴く防風林の脇道を通る。水路に沿って道端いっぱいには水色の野草の花が咲く小径を、爽やかな微風を感じながら歩く。日差しに恵まれた半日の田園空間の散策であったが、「街歩き」とは別の満足感があった。また、5人の酪農家集団（AB-MOBIT）が創る厚床のフットパスは、雄大な空の広がりや遙か遠方の地平線と、穏やかな起伏のある緑の丘陵地に牛の姿しか見えない景観が、日常生活に疲弊した都会人の心身を癒し壮大な心持にしてくれる。

歩く道の文化は目標を掲げて教育的である必要はなく、自然のなかに身体も精神もゆったりと開放し、本来の自分と向き会える機会ととらえれば良いと考える。誰でも、どこでも、何時でも、気軽に歩けることが歩く文化の魅力である。イギリスのフットパスは快適であるが便利な道ではない。コンビニもなければ自動販売機も置いてないトイレもない。必要なものは通過する村や街で調達し、すべて自己責任で行動する。「快適さ」と「便利さ」は同じではない。過剰な利便性は人間本来の能力と意欲を減退させ、エネルギー負荷の増大を招く場合も多い。現代の日本は、年中無休

と24時間営業の店舗や街頭の自動販売機の設置のおかげで、欲しい時に欲しいものがすぐに手に入る。しかし、消費者の購買力には限度があることから、営業時間の長さや収益とが必ずしも比例するわけではない。グリーンコンシューマーという、持続可能な社会の形成を目指す賢い消費者を意味する言葉がある。企業と消費者が協働で環境問題に対する行動を起こすことで大きな成果を期待することができる。過剰なサービスと利便性が当たり前となって、疑問すら持たない社会が怖い気がする。例えば、多くの西欧諸国では宗教上の安息日への配慮もあり、日曜日はほとんどの商店が休日であるし、平日でも飲食店以外は8時ごろまでには閉店してしまう。まとまった時間に効率よく仕事や買い物などを行ない、余暇時間を家族で楽しむのである。それでも社会的機能と市民の日常生活は成立している。勿論、日給や時間給に対する労働への賃金単価は、見合った形で改善しなければならない。先ごろフランスのニコラ・サルコジ大統領が、経済活性化のために日曜営業の発言をして市民の不評をかっていた。

人生の豊かさを何に求めるかは人によって異なると思うが、それは日々の生き方にも影響を及ぼすと思う。フットパスを歩くことは、自己のライフスタイルを見つめ直し、現代社会の生活文化の有り様を再考する良い機会である。歩く速度で考えヒューマンスケール（人間的尺度）で物事を認識する「歩く文化」は、人間の歩く速度と目線で自然を観察し、農村や都市の地域景観について、五感を通して体感することでもある。景観形成や街づくりが一層身近になり、快適に暮らせるまちづくり文化が形成されるのではなかろうか。



※写真撮影：筆者